第４学年　国語科学習指導案

授業者　　八木橋　傑
喜田　里実

１　単元名　　新美南吉の世界へ　　「ごんぎつね」

２　単元の観点別目標

・様子や行動、気持ちや性格を表す語句の量を増やし、話や文章の中で使うとともに、言葉には性質や役割による語句のまとまりがあることを理解し、語彙を豊かにすること。【知識・技能　（１）オ】
・情景や言動の叙述をもとに、その時のごんと兵十の「心の物語」を豊かに想像し、ノートに書くこと。【思考・判断・表現　C 読むこと（オ）】
・積極的に、登場人物の気持ちの変化や性格、情景について、場面の移り変わりと結び付けて具体的に想像し、学習の見通しをもって物語の日記を作ろうとすること。【学びに向かう力・人間性等】

３　単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	学びに向かう力・人間性等
様子や行動、気持ちや性格を表す語句の量を増やし、話や文章の中で使うとともに、言葉には性質や役割による語句のまとまりがあることを理解し、語彙を豊かにしている。	情景や言動の叙述をもとに、その時のごんと兵十の「心の物語」を豊かに想像し、ノートに書いている。	積極的に、登場人物の気持ちの変化や性格、情景について、場面の移り変わりと結び付けて具体的に想像し、学習の見通しをもって物語の日記を作ろうとしている。

４　単元について

（１）　単元の趣旨

本単元は、教材文「ごんぎつね」を通して、叙述に即して想像しながら読むとともに、小ぎつねのごんと兵十の関係として繰り広げられる心の葛藤をイメージ豊かに読み深めることをねらいとしている。

本教材「ごんぎつね」は、新美南吉の代表作であり、教科書教材として初めて載ったのは昭和３１年である（大日本図書）。それ以降、現在に至るまでどこかの教科書に必ず取り上げられてきた。いたずらばかりするごんが兵十のおっかあの死をきっかけに償いを始めるが、ごんの兵十に対する思いは親しみに変わっていく。しかし、ごんの行動が兵十にわかってもらえたのは火縄銃で撃たれた後というドラマチックな展開である。児童が場面ごとにごんや兵十に寄り添うことで思いを深めていける教材である。ごんと兵十の関わりを通して、ごんの気持ちの葛藤を想像させ、「ごんぎつね」の世界を味わわせていきたい。

第一次で、児童は教材文「ごんぎつね」を読み、音読・朗読を中心にあらすじを捉えていく。普段あまり耳にしない言葉も多く出てくるため、意味調べをさせる。時代背景と合わせて理解できるように写真などを使って補足し、ごんと兵十の生活している村の様子を想像できるようにする。その上で、初発の感想を書き、それぞれの児童がどのような点に心を引かれたのかを交流することで、読みのめあてをもたせる。

そして、第二次では、場面ごとに教材文を深く読み、ごんの行動や心の動きを読み解いていく。本教材は６つの場面で構成されている。①雨上がりのある日、ちょいといたずらをしたくなり、兵十のうなぎを持ち帰ってしまったごん。②兵十のおっかあの死を自分のせいだと思いこみ、③つぐないを始めるごん。④自分の行動を兵十がどう思っているか気になるごん。⑤自分がやっているのに神様のしわざと思われ、引き合わないなあと思うごん。⑥そう思いつつも、つぐないをやめず、最後には兵十に撃たれてしまうごん。中心人物であるごんの心情の変化を追っていくが、それは、ごんと兵十の関わりの中で起こっていく。また、最後の場面は、ごんの兵十に対する思いが高まるのに対して、兵十には悪ぎつねのごんという認識しかないことから起こる悲劇である。そこで、会話文や行動を手がかりとして２人の

心情の変化を比べながら児童に読み取らせていきたい。そのための手立てとしてごん日記または、兵十日記を書かせながら交流し、自分の読みと友だちの読みを比較させることで読解力を養っていきたい。

また、ICT 機器を効果的に活用した学習方法を取り入れる。１つ目は、拡大投影機を用いる方法である。少数派や内容の深い意見をあらかじめ教師が印刷しておき、拡大投影機を用いてクラス全員に共有し、話し合いのきっかけを作ることで、話し合いを深いものにするとともに、学習課題に迫れるようにする。２つ目は、学習用の個人タブレットを用いる方法である。学習のまとめに登場人物の気持ちをペイントを使って色で表現することで、児童一人一人の気持ちが表現できる。そこから、その色にした理由を意見交流することで、児童一人一人の学習の深まりに迫ることができる。

（２）学習者について　　１組　八木橋　傑

本学級の児童は、男子９名、女子１７名で構成されている。本単元を学習するにあたり、以下のような調査を行った。

調査日　令和２年８月２１日　　調査人数　男子９人　女子１７人　計２６名

１「きつね」には、どのようなイメージがありますか。

・こわい　５名　・黄色い　５名　・かわいい　４名　・やさしい　３名
・もふもふ　２名　・ずるがしこい　２名
以下１名
・病気をもっている　・凶暴　・人をだます　・野生　・体がきれいでない
・血に飢えた犬　・子供思い　・美しい　・すばやい　・神社にいる

２「ひとりぼっち」という言葉から、どのようなことを想像しますか。

・かわいそう　１２名　・さびしい　６名　・悲しい　３名
以下１名
・雪が降って一人で食料を探す　・仲間はずれ　・暗い　・おたく　・いじめられている

３　きつねが登場するお話

・ごんぎつね　１４名　・きつねのおきゃくさま　１２名
以下１名
・ともだちや　・手ぶくろを買いに

４　国語の物語文の学習で、タブレット（PC）を使ってみたいですか。

・はい　２６名　・いいえ　０名

５　国語の物語文の学習で、タブレット（PC）を使って、どのような学習をしてみたいですか。

・問題を解く　・登場人物を動かしてみたい（プログラミング）
・音読　・調べ学習　・物語の世界を映像で見てみたい

本学級は、どんなことにも意欲的で活気がある児童が多い。３年生のころも、意欲的に音読をしたり、発表したりする子が多かった。しかし、自分の考えを発表することはできるが、友だちの意見をうけて自分の意見を述べたりすることは十分できるとはいえない。また、感覚で自分の考え表現している場合が多く、叙述からきちんと根拠を探して、理由を述べながら自分の意見が言える児童はまだ少ない。前年度からプログラミング学習に力を入れているため、タブレットを使用した学習の関心がとても高い。国語の物語文でも使用してみたいという意見がとても多かった。現段階では、試行錯誤の段階であるが、タブレットを効果的に活用した物語文の読みの教材開発を進めていきたい。

本単元では、まず、叙述をもとに自分の考えがもてるよう、根拠となる本文に線を引いてから、ノートに自分の考えを書かせたい。そして、自分の考えをはっきりさせた上で、友だちの考えを自分の考えを比べながら聞く習慣をつけさせたい。「きつね」のイメージは、両極に分かれ「怖い」などの悪いイメージと「優しい」などの良いイメージに分かれた。「ごんぎつね」と「きつねのおきゃくさま」を知っている児童が多かったため、イメージが分かれたと考えられる。物語のあらすじで、登場人物の性格などをしっかりととらえることが大切である。

（３）教材研究

この物語は、いたずら小ぎつねのごんの兵十への片思いの物語である。人間と動物という住む世界の違い、きつねにとって人間は自分を殺すかもしれないこわい存在で、人間にとってきつねは作物や家畜を荒らす困った存在である。にもかかわらず、ごんは兵十のおっかあの死をきっかけに兵十に想いを寄せていく。

ひとりぼっちの子ぎつねは、村に出てきてはいたずらを繰り返していた。このいたずらは恐らくひとりぼっちのさびしさ、つまらなさを紛らわすものであったのだろう。いたずらをすることで間違った方法とはいえ、誰かと関わる事ができるからである。いたずらばかりするごんのことを村人たちは、困った存在、憎らしい、懲らしめねば、自分たちの生活を脅かす存在と思っていたことだろう。兵十も同じである。そんなある日、漁をしていた兵十のせっかく捕った獲物を逃がすといういたずらをごんがする。ごんにとっては、「ちょいと、いたずらがしたくなった」だけだった。しかし、兵十にとってはそんないたずらをされたらたまったものではない。「ぬすとぎつねめ。」という言葉には、強い怒りが込められている。２人の思いの間には、深い溝を感じる。この溝は、最後まで埋まることはなかった。だから、最後の悲劇を生むのである。

兵十のおっかあの死ぬ間際の最後の願いであった「うなぎ」を自分がとってしまったのだと思い、おっかあを死なせたのは自分に責任があると思ったごん。おっかあが死んで兵十をおれと同じひとりぼっちにしてしまったと思うごん。そんな優しさをもっていたのだ。ごんはひとりぼっちのさみしさを知っているのだ。ごんは、いままでひとりぼっちでさみしかったのだ。さみしさを紛らわすためのいたずらだったのかもしれない。ごんは、「こらあ。」と叫びながら追いかけてくる村人と、鬼ごっこをしている感覚だったのだろう。

ごんは、兵十を自分と同じ境遇と思い、兵十に親近感をもつようになる。栗や松茸を持って行くたびに兵十の様子を目にし、兵十のことを色々知るにつれ、その親近感が強くなっていったに違いない。そして、兵十のところに行くのが償いのためではなく、兵十に会うことが目的になっていったのではないか。「今日は、兵十なにしているかな。」「昨日の栗はおいしかったかな。」

ごんが、ぶらぶら遊びに出かけた月のいいばんも、昼間のうちに兵十の家に栗を届けていたに違いない。兵十と加助が自分のやったことを話しているので気になって後をつけ、長い長いお念仏の間もじっと待っていたのだ。兵十と加助の話の続きを聞きたかったかもしれないが、ここで待っていたらまた兵十に会えるという気持ちもあったのかもしれない。かげぼうしをふみふみなんて、なんと楽しそうなことだろう。距離が近すぎてまた加助が振り向いたら見つかってしまうかもしれないのに、ごんは、そんなことを考えている様子もない。

ごんは、兵十に喜んでほしくて栗や松茸を持って行っていたので、お礼を言ってほしいとか、自分がやっているとわかってほしいという気持ちはなかったと思う。ところが、加助の話で「神様のしわざ」となり、兵十は「神様にお礼を言う」ことになってしまった。当然、兵十にばれないように行っているのだから仕方ないが、「頑張ったのに」「気づいてほしい」という気持ちがどこかにあるのだろう。しかし、ごんは自分が認められ褒められることもないことがこのときわかったにもかかわらず償いをやめなかった。それは、償いよりも兵十に喜んでほしいという気持ちが強くなっているからではないだろうか。けなげとしかいいようがない。このごんと兵十の関係性は、第三学年で学習をした教材文「おにたのぼうし」に似ている。女の子はお母さんへの愛情、おにたは女の子への愛情と相手を思う気持ちが一方通行である内容であった。おそらく１組の児童は、この愛情の一方通行の関係性から「おにたのぼうし」を連想することだろう。

一方、兵十はどうだかろうか。ごんと同じひとりぼっちだろうか。家族がいなくなったことに関しては、確かにごんと同じといえる。おっかあが死んだ寂しさを感じていたことだろう。洗濯を自分でし、食事の用意も自分でしなければならない。しかし、兵十には加助や弥助、かじ屋の新兵衛、吉兵衛など村の仲間がいる。村の共同体が存在し、自分を気にかけてくれる人が周りにいるのである。兵十からすれば、ごんと同じひとりぼっちではなかったのだ。

しかし、そんなごんの気持ちを兵十が知るはずもなく、ごんに対して憎しみを感じていた兵十が、最後には、また「いたずら」をしに来たと思い、ごんを火縄銃で撃ってしまう。その行動には何のためらいもない。その後で土間に置いてある栗を見つける。今まで「神様の仕業」と思っていたことが

ごんの行為であったと気づく。状況からすれば土間に置いてある栗を持ってきたのはごんである。でもまさかあのいたずら者のごんがそんなことをするはずがないと思いながらも倒れているごんに声をかける。「ごん、お前だったか。いつもくりをくれたのは。」うなずくごんを兵十はどんな気持ちで見つめたか。そしてその言葉を、ごんはどんな思いで聞いてうなずいたのか。青いけむりが１人と一匹の悲しみや後悔を象徴しているのだろう。

ここで、物語の冒頭「これはわたしが小さいときに、村の茂平というおじさんから聞いたお話です。」に戻ると、この物語が伝承されていることに気付く。最期に栗を持ってきたことに気付いてもらえたごんと、憎きごんぎつねを撃ち殺すことができた兵十にとって、満足のいく結末だったのであろうか。ごんは、一番分かり合いたかった兵十と最期に分かり合えることができた。最期の「うなずき」は、ごんの嬉しさを暗示しているのではないだろうか。一方、兵十はごんを撃ち殺してしまったことを悔やんでいると思う。情景描写の「青いけむり」が１人と一匹の悲しみや後悔の象徴しているのではないだろうか。しかし、悲しいだけがこの物語ではない。この物語の結末は兵十しか知らないはずである。つまり、これが何年も語り継がれていることから、兵十が誰かに話したということになる。ごんの行動が村人の心を打ち、村人の心の中でごんは生き続けることができる。ずっとひとりぼっちだったごんが皆に認められ、愛されることとなった。「ごんぎつね」の結末は、確かに悲しいが、その裏に深い愛がある物語であると私は思う。

（２） 学習者について　　２組　　喜田　里実

本学級の児童は、男子９名、女子１６名で構成されている。本単元を学習するにあたり、以下のような調査を行った。

調査日　　令和２年　８月　２４日　　調査人数　男子９名　女子１５名　計２４名

１「きつね」には、どのようなイメージがありますか。

・いたずらをする　７名　　・黄色い　３名　　・顔が三角　３名　　・すぐ逃げる　２名
・かわいい　２名　　・足が速い　２名　・化ける　２名
以下１名
・やさしそう　　・国語で出てくる　　・きょうぼう　　・炎

２「ひとりぼっち」という言葉から、どのようなことを想像しますか。

・悲しい　７名　　・さみしい　７名　　・友達がいない　３名　　・仲間はずれ　２名
・いつも一人　２名
以下１名
・声をかけてもらえない　　・かわいそう　　・まわりにだれもいない

３　きつねの登場する絵本・童話などを知っていますか。

・きつねのおきゃくさま　１５名　　・ともだちや　５名　　・ごんぎつね　４名
以下１名
・狐の嫁入り　　・手ぶくろを買いに　　・きつねの電話ボックス

４　国語の物語文の学習で、タブレット（PC）を使ってみたいですか。

・はい　１７名　　・いいえ　７名

５　国語の物語文の学習で、タブレット（PC）を使って、どのような学習をしてみたいですか。

・写真を共有する　　・意見を先生に送る　　・分からないことがあったら調べる
・書いた意見をテレビに映す

本学級は優しい児童が多く、普段から穏やかに生活できることが多い。学習においては、積極的に発表をして授業に参加する児童もいれば、意見や考えはあるのにそれを発信せずに過ごしてしまう児童も少なくない。友達の発表もよく聞いているようではあるが、それを自分の意見と関係づけて考えることは難しい。

普段からペアでの相談タイムや意見交換を行っているため、隣の友達に自分の意見を伝える活動には慣れ親しんでいる。本単元でも、ペア学習を取り入れることで、自分の考えを整理したり、友達の新たな考えに触れたりする機会をもちたい。また、一度友達に話すことによって全体で発表する勇気づけになることも期待している。

本単元「ごんぎつね」については、あまり知らない児童が多い。２年生で学習した「きつねのおきゃくさま」で最初にきつねが他の動物を食べようとした場面の印象が強いのか、きつねに対しては「悪さをする、いたずらっ子だ」という様なイメージが多くある。今回登場する「ごん」も、はじめはいたずら好きのきつねとして紹介される。イメージだけで話が進まないように、大きな話の流れや、言葉の一つ一つにこだわって読み深めていきたい。

タブレットに関しては、総合的な学習の時間で行っているプログラミング学習の成果もあって、使用することに興味をもっている児童が多い。しかし、まだ「いじりたい」という気持ちが先行してしまうことも多く、国語の学習でうまく活用するには工夫が必要である。児童のアンケートの中には「普段はなかなか発表できない友達の意見をテレビに映したらどうか」という意見もあった。それを含め、有効な活用方法を検討していく。

（3）教材研究

この「ごんぎつね」という教材は、私自身も小学生の頃に学び、とても印象深く残っている物語だ。というのも、当時の担任はこの単元に入る数カ月前に実母を亡くしていて、母を亡くすことがいかに辛く悲しいことなのかを涙ながらに語っていたからである。当時 10 歳の私にとっては、正直なところ、物語の内容よりも担任のその姿が強く刻まれた。おそらく授業では登場人物の気持ちを考えながら丁寧に読んでいったのだろうが、漠然と「悲しいお話」として私の記憶に残っていた。

今回、教師として初めて「ごんぎつね」と出会う。改めて読み直してみると、物語の奥深さや味わいに気づくことができた。

まずはごんの人物像について考えてみたい。文章中ではごんのことを「ひとりぼっちの小ぎつね」と表している。「子ぎつね」ではなく「小ぎつね」である。ごんがただのいたずら好きの幼いきつねかというと、実はそうではないと思える叙述がいくつかある。第 2 場面では弥助の家内のおはぐろを見て「村に何かある。」と予想をし、秋祭りかと考えるも、太鼓の音が聞こえないことや立つはずののぼりがないことからそうではないと推察することができる。また、兵十の服装や持っているものから兵十の母親が死んでしまったことを悟るのである。第 5 場面では、時間がかかるであろうお念仏をききながら、じっといどのそばにしゃがんでいた。これらのことから、ごんは村の慣わしについての知識があり、辛抱強い面もあると言える。ただのいたずらぎつねではなく、実は賢い小柄なきつねだったのではないだろうか。

それでは、なぜごんはいたずらを繰り返していたのだろうか。ごんのいたずらには、共通していることがある。まず、「直接人へのいたずらはしない」ということである。畑のいもや菜種がらやとんがらし、そして兵十がとった魚たち。どれも食べ物にいたずらをして、村人を困らせている。ごんは誰かを傷つけたくていたずらをしているのはないということがわかる。しかも、いたずらした食べ物も「食べるためではない」ということも共通している。いもを「掘る」のではなく「掘り散らかす」、とんがらしを「取る」のではなく「むしり取る」、兵十の魚はそのまま逃す…。どれも、生きるための食料を得るためにやったものではない。そこにはただ、村人たちに自分の存在を気にかけてもらいたい、忘れないでほしいという思いがあった。いたずらは、ひとりぼっちのごんが誰かとつながる手段だったのだ。

兵十のうなぎを取ったのも「ちょいと、いたずらがしたくなった」という軽い気持ちからだった。しかし後に兵十の母親が死んだことを知ったごんは、自分のせいで兵十は母親にうなぎを食べさせられないままひとりぼっちになってしまったと後悔する。それからのごんは、同じ「ひとりぼっち」の兵十のことが気になって仕方なかった。第 3 場面では、ごんはこちらの物置の後ろから兵十を眺めていた。そしてごんは向こうへ行きかけている。「こちら」に対する「向こう」は兵十がいる方である。ごんはなぜ兵十に近寄って行こうとしたのだろうか。見舞いの品も持たず、捕らえられるかもしれない兵十のところに。私は、ごんが兵十とならこの境遇を分かち合えると思い、引き寄せられるように向かっていったのではないかと思う。そこでいわし売りの声が聞こえてはっと我に返り、いわしを投げこむというつぐないをするのである。

このつぐないの様子からも、ごんの兵十への気持ちの変化が読み取れる。最初は盗んだいわしを投げ入れるところから始まる。そのせいでいわし屋に殴られたことをしったごんは、こんどはそっとくりを置いて帰るのである。さらには見つけるのが大変であろう松たけも持っていく。だんだんと、つぐないが丁寧になっていくのが分かる。さらには、加助に「神様のしわざ」であるとされ、引き合わないなと思いながらも、そのあくる日もくりを届けるのである。「自分がやっていると気付いてほしいけれど、直接会うのは怖い。兵十に拒絶されてしまったらどうしよう。」きっとごんの中にはこんな気持ちがあったのではないだろうか。ごんはつぐないを続けるうちに「つぐないをする相手」以上のつながりを兵十に感じていたのだろう。

第 6 場面では、これまでごんの視点で進んでいた物語が急に兵十の視点で語られる。ごんの気持ちなどつゆ知らずの兵十。ごんのことを「ごんぎつねめ」と強い憎しみをもって見ている。そして兵十に撃たれるごん。この場面で、気になる表記の一文がある。それは「兵十はかけよってきました。」という文である。第 6 場面が兵十の視点で進むのであれば、「兵十はかけよっていきました。」とするのが正しい。確かに「かけよってきました」でも「かけよっていきました」の意味で読むことはできるのでただの深読みかもしれないが、これはごんから見て「兵十が自分のところにかけよってきてくれた」というううれ

しさを表す一文なのではないか。私は、そうであってほしいなと思う。
　くりを運んだのが自分だとわかってもらえたごんと、憎きごんぎつねを撃ち殺すことができた兵十。これは互いにとって満足のいく結末だったのだろうか。ごんは、おそらくうれしい気持ちで最期を迎えたのではないかと思う。死んでしまっては元も子もないが、それでも最後に兵十と分かり合えたのだ。しかし兵十は、ごんを撃ったことを悔やんだのではないだろうか。その証拠に、このごんの話が村中に、何年にもわたって語り継がれている。兵十がごんを撃ったことは、兵十しか知らない。つまり、兵十がこのことを誰かに話さなければお話として伝承することはないのだ。最初に登場する茂平さんが誰なのかは明らかにされていないが、その茂平さんもごんの話を広めるべく「わたし」に語っている。ごんの行いが村人の心を打ち、村中の人がごんを知ることになる。ひとりぼっちだったごんが皆に愛されるきつねになった。この「ごんぎつね」という物語は、悲しいけれど深い愛を感じる話だと、改めて感じた。

５　研究仮説との関わり

〈研究仮説１〉
読みの交流の内容を明確にし、場を設定すれば、豊かな読解力を育てることができるだろう。

（１） 発問の工夫
第二次で、読みの交流を深めるために以下の工夫を行った。
① 「なぜ」や「どうして」を発問、学習課題で使わないことで、答えが一つに絞られないようにした。幅広く子供の意見が出てくることを期待したい。
② その場面だけから考えるのではなく、前の場面を振り返ったり、後ろの場面を読んだりすることが必要な発問にしている。物語全体を捉えられる工夫をした。

（２）板書の充実
教科書の挿絵を板書に使い、挿絵も登場人物の様子や気持ちを読み取るヒントになるよう、工夫をしていきたい。前回までの活動を踏まえた活動も多いので、心情等を表すキーワードとなる文言の掲示物を作成しておき、振り返りながら学習を進めていくことで、さらに読みを深めていくことができると考える。

（３）読み手日記
心の物語として、ごん日記、兵十日記、読み手日記の形でその時間の学習のまとめとして書く。

〈研究仮説２〉
読みの交流の形態を工夫し、発達段階に応じた活動を設定すれば、豊かな読解力を育てることができるだろう。

（１） 読みの交流の形態について
隣同士で考えを交流させるようにする。自分の考えを発表させるだけでなく、友達の考えで良いと思ったものは、感想等をどんどん取り入れていくようにする。(コロナ対策)

（２） ノート指導の工夫
友達との読みの交流の中で、自分と違う考えや、すばらしいと思った考えのメモを取らせたい。また、ごんや兵十の立場で日記を書かせることで、登場人物の気持ちに迫る工夫を取り入れたい。

（３）ICT 機器の効果的な使用について
ICT 機器を効果的に活用した学習方法を取り入れる。１つ目は、拡大投影機を用いる方法である。少数派や内容の深い意見をあらかじめ教師が印刷しておき、拡大投影機を用いてクラス全員に共有し、話し合いのきっかけを作ることで、話し合いを深いものにするとともに、学習課題に迫れるようにする。２つ目は、学習用の個人タブレットを用いる方法である。学習のまとめに登場人物の気持ちをペイントを使って色で表現することで、児童一人一人の気持ちが表現できる。そこから、その色にした理由を意見交流することで、児童一人一人の学習の深まりに迫ることができる。

6　単元の指導計画と評価計画（１１時間扱い）

過程	時間	学習活動と内容	指導上の留意点と評価方法
第 一 次	5	○単元について話し合い、学習の見通しをもつ。 ・場面の様子や気持ちがわかるように読み聞かせしたり音読したりする。 ・語句調べをしたり、独特な言葉づかいを理解したりする。 ・読みを通して、登場人物，出来事、場面構成などをつかむ。 ・感想を書き、読みのめあてをもつ。	○新美南吉の生涯について簡単に説明する。 ○馴染みのない言葉も多く、裃などイメージのつかみにくいものは、絵や写真を用意する。また、ごんや兵十のくらした村の様子がわかるように資料を用意する。 ○見慣れない語句について理解してから本文を読み、ある程度あらすじをおさえてから感想を書かせるようにする。 ○心に残った場面を集約したり，疑問に思ったことまとめたりして，課題をつくる。 ◇様子や行動、気持ちや性格を表す語句の量を増やしている（ノート）【知識・技能】
第 二 次	1 （1組本時）	**「こいつはつまらないな」と思った理由を考えよう。** ○「こいつはつまらないな」と思ったごんの気持ちを考える。 ・兵十にわかってもらいたいと思っている。だから、続きの話が聞きたくて待っていたのに。 ・自分がしていることを兵十はどう思っているのか知りたくてずっと待っていたのに神様の仕業になってしまったから。 ① ペアでの交流 本文からの根拠をもとに、自分の考えを伝える。 ② 全体での交流 自分の意見や、先ほど聞いた友達の意見をもとに、より多くの友達の意見を知る。 ○ ごんになった気持ちで、その日の日記を書く。	○遊びに出かけたごんが、二人の姿を見かけてついて行ったわけやお念仏が終わるまで待っていたわけを考えさせる。 ○栗や松茸を持っていっているのが自分だと気付いてもらいたいごんの気持ちを読み取らせる。 ○兵十は、加助に神様の仕業と言われてどう思っているか投げかける。 ◇自分の償いが神様のしわざだと思われてしまい、「つまらないな」と思ったごんの気持ちを読み取っている。（発言・ノート）【思考・判断・表現】 ◇増やした語句を、日記の中で使っている。（日記）【知識・技能】

		「ひきあわないなあ。」と思いながらも、兵十の家へ行ったごんの気持ちを考えよう。	
	1	○ごんは、「ひきあわない」と思いながらも、「明くる日も」兵十の家に行った理由を考える。 ・神様の仕業になっても、まだまだつぐないきれていないと思って続けた。 ・やめてしまったら、兵十はご飯の用意が大変になるから。 ・ごんは、兵十が好きになったのかもしれない。 ・兵十に会うのが楽しみになっていた。 ・兵十と仲良くなりたい。 ① ペアでの交流 本文からの根拠をもとに、自分の考えを伝える。 ② 全体での交流 自分の意見や、先ほど聞いた友達の意見をもとに、より多くの友達の意見を知る。	○前時でのごんの気持ちから考えると矛盾していることを確認する。 ○続けていたら、いつか自分がやっていることに気付いてもらえると思っていたのか、気付いてくれなくても続けたのか考えさせる。 ◇「ひきあわないなあ。」と思いながらも明くる日も兵十の家へ行ったごんの心情を、考えている。 （発言・ノート）【思考・判断・表現】
		○ ごんになった気持ちで、その日の日記を書く。	◇増やした語句を、日記の中で使っている。（日記）【知識・技能】
	1 （2組本時）	**この物語の結末は、二人にとって満足のいくものだったのだろうか。**	
		○栗をもってきてくれたのがごんとわかった兵十の気持ちを考える。 ・まさかあのごんが今までくりをくれていたのか。 ・気づかなくてごめん。 ・もっと早く気づいていれば。 ・なぜそんなにもおれのために。 ○撃たれた後、ごんがうなずいた時の気持ちを考える。 ・やっと気付いてくれた。うれしいよ。 ・これでやっとつぐないができた。	○ごんを見つけた時、火縄銃を構えた時、ごんがばたりと倒れた時、土間に栗があるのは見た時、ごんがうなずいた時の兵十の気持ちの動きを丁寧に押さえる。 ○毎日栗を届けてくれたのはごんだということはわかったが、その理由やごんの兵十に対する想いまでは理解されていないことを押さえる。 ○「青いけむり」は、両者の悲しみを表した叙述であることを心情の変化を読み取り押さえる。

		・悪いのはおれだから、ごめん兵十。 ① ペアでの交流 本文からの根拠をもとに、自分の考えを伝える。 ② 全体での交流 自分の意見や、先ほど聞いた友達の意見をもとに、より多くの友達の意見を知る。	◇これまでのごんと兵十の関係から、それぞれの思いを考えている。 （発言・ノート） 【思考・判断・表現】
		○ 兵十になった気持ちで、その日の日記を書く。	◇増やした語句を、日記の中で使っている。（日記）【知識・技能】
	1	**村の人たちがこのごんのお話を子どもたちに代々語りついでいるのはどうしてだろう。**	
		○兵十からごんのことを聞いて、村の人たちはどう思ったのか考える。 ・あのいたずら者のごんが信じられない。 ・ごんにも優しい気持ちがあったんだな。 ・ごんはきっとひとりぼっちでさみしかったからいたずらしていたのかもしれない。 ・ごんに悪いことをしたな。墓をつくってやろう。 ・稲荷神社にまつって、毎日拝もう。 ・こんなあやまちをくりかえさないために、子どもたちに伝えていこう。	○兵十だけでなく村人からもごんが受け入れてもらえたことに気づかせる。 ◇読み取ったことをもとに、語り継いだわけについて自分の言葉でまとめている。（発表・ノート） 【思考・判断・表現】 ② ペアでの交流 本文からの根拠をもとに、自分の考えを伝える。 ② 全体での交流 自分の意見や、先ほど聞いた友達の意見をもとに、より多くの友達の意見を知る。
第三次	2	○二次で書いたさまざまな立場の日記を読み合い、感想を伝え合う。（付箋）	○自分と同じ立場のものだけでなく、違う立場で書いた日記も読み合うように指示する。 ◇積極的に、登場人物の気持ちの変化や性格、情景について、場面の移り変わりと結び付けて具体的に想像し、学習の見通しをもって「ごん日記」を作ろうとすること。 【学びに向かう力・人間性等】

7　本時の指導（６／１１）　　１組　八木橋　傑

（１）　本時の観点別目標

いたずらで、兵十のうなぎを取り、償いをしているごんの気持ちを考え、ごんが「こいつはつまらないな。」と思う理由から、兵十に気づいて欲しいと想うごんの気持ちと直接誤解を晴らすことができないごんの心の葛藤を情景描写や叙述をもとに想像して読むことができる。【読むこと】

（２）　仮説に迫るための具体的手立て

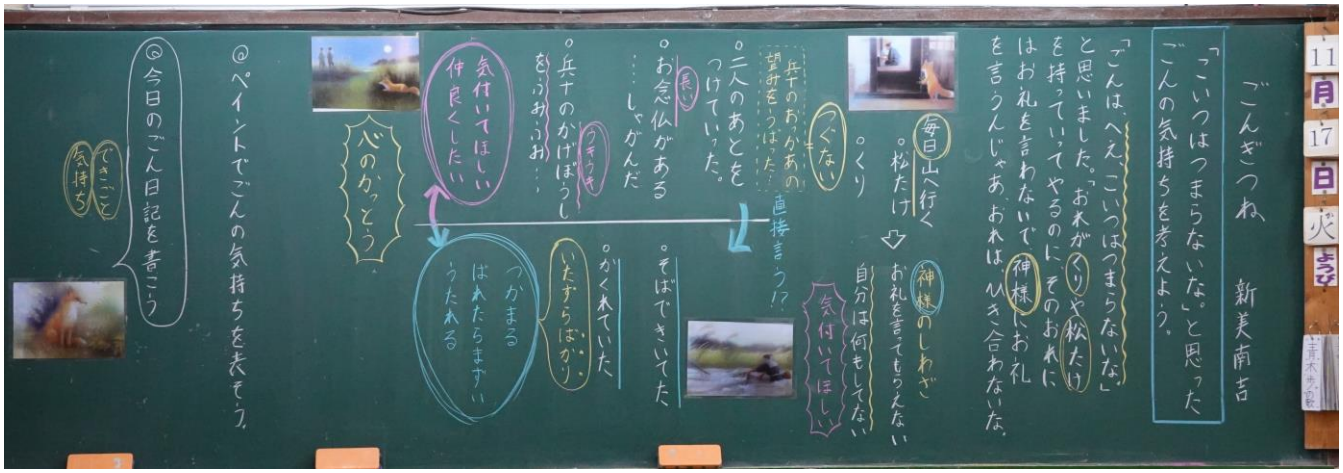
・「こいつはつまらないな。」と考える根拠となる叙述に線を引かせ、それをもとに、自分の考えをノートに書きこむようにする。〈仮説１〉
・交流では，自分と友達の意見を比べ、ノートに似ている点や異なる点を書き込んだり、友達の意見でよいと思ったことを単語など短い言葉で書き込んだりする。〈仮説２〉
・学習用の個人タブレットを使用し、ごんの気持ちをペイントを使って色で表現することで、色鉛筆で表せない、色合いを表現させることができ、児童一人一人が考えたごんの気持ちに迫るようにする。〈仮説２〉

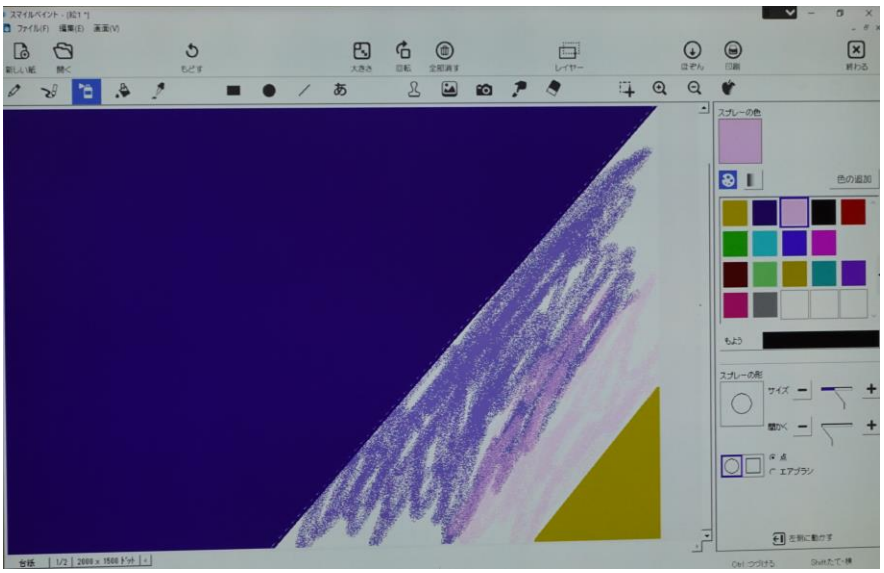
（３）　展開

過程	時配	学　習　活　動　と　内　容	◇指導上の留意点と◎評価
導入	２	**１　本時のめあてをつかむ。** 「こいつは、つまらないな。」と思ったごんの気持ちを考えよう。	◇本時までに、学習問題に対する自分の考えを叙述をもとにノートに書かせておく。〈仮説１〉 ◇ごんが兵十のために行った償いのことをおさえる。
展開	３５	**２　自分の考えを明らかにし、ペアで交流し、その後クラス全体で交流する。** ○ノートに書いた考えを、友達と伝え合いましょう。友達の意見は、ノートにメモをしましょう。 ① ペア（グループ）内での交流 本文からの根拠をもとに，自分の考えを伝える。 ②全体での交流 自分の意見や，先ほど聞いた友達の意見をもとに，より多くの友達の意見を知る。 ○ごんは、どうして「こいつは、つまらないな。」と思ったのでしょう。 ・お礼を言ってもらえなかったから。 ・こんなに努力したのに、気づかれないから。 ・想いが伝わらなかったから。 ・神様のしわざと兵十の思われたから。 ・自分は何もやっていないことになったから。 ○ごんは、どうして欲しかったのでしょう。 ・気づいて欲しかった。 ・仲良くしたかった。	◇「こいつは、つまらないな。」と考える根拠となった叙述に線を引かせ、それをもとに、自分の考えや友達の考えをノートに書きこむようにする。〈仮説１〉 ◇交流では、自分と友達の意見を比べ、ノートに似ている点や異なる点を書き込んだり、友達の意見でよいと思ったことを単語など短い言葉で書き込んだりする。〈仮説２〉 ◇ごんの心の葛藤がわかるように、上段には「兵十に気づかれたい気持ち」下段には「隠れて

		○本文を読み返して、ごんのどの行動に気づいて欲しい気持ちが表れているか探してみましょう。 ・二人のあとをついていきました。 ・お念仏がすむまで、井戸のそばにしゃがんでいました。 ・兵十のかげぼうしをふみふみ行きました。 ・兵十と加助の話を聞いていました。	いなければならない気持ち」に分けて板書する。 ◇時間をとり、教科書の叙述に線を引かせる。 ◇「お念仏がすむまで」「かげぼうしをふみふみ」などの叙述から、ごんが兵十と加助の話を聞きたくてしかたなかった気持ちを考えさせる。
		○近くできいているのだから、直接兵十に話しをして、誤解を解けばよいのにしなかったのはどうしてでしょう。 ・今まで、いたずらばかりしていたから、つかまると思った。 ・撃ち殺されると思った。	◇ごんの人物像を模造紙を使って振り返り、いたずらばかりしていたから、兵十の前に姿を現せられない気持ちを考えられるようにする。 ◇子供の「うなぎ一匹と松茸たくさんでは割に合わない」という意見を取り上げて、ごんにとって兵十から奪ったものはうなぎではなく、兵十のおっかあの命だったことに気づかせる。
まとめ	7	**３　話し合いの結果を踏まえて，もう一度自分なりの考えをまとめる。** **（タブレットのペイント機能を活用）** ・ごんは償いのために行っていたので、兵十にお礼を言われなくてもいいと思うけど、神様がやっていると思わないで、もしかしたらごんがやっていると気づいてほしい。 ・神様がやったことと思われたのは、偉大なことなので正直うれしいけど、ごんがやったと気づいてくれなくて悲しい気持ち。	◇タブレットのペイント機能を活用し、ごんの気持ちを色で表現させる。色鉛筆で表せない、色合いを表現させることで、児童一人一人が考えたごんの気持ちに迫るようにする。〈仮説２〉 ◇ペイントで表現したごんの気持ちを本時の学習と関連づけて説明させる。
	5	**４　本時のごん日記を書く。** ・兵十の話を聞いていたら、ぼくの償いが神様の仕業にされてしまった。悪いのはぼくだから仕方ないけど、気づいてほしいな。でも、直接行ったら、きっと今まで「いたずらばかり」していたから、つかまちゃうよな・・・。」	◎増やした語句を、日記の中で使っている。（日記）【知識・技能】 ◎ごんが「こいつはつまらないな」と思う理由や償いを続けるごんの想いを情景描写や叙述をもとに想像して読んでいる。（日記・ノート）【読むこと】
	1	**５　次回の学習課題「ひき合わないなと思いながらも、兵十の家に行ったごんの気持ちを考えよう。」につなげる。**	◇これまでのごんの行動と償いの意味合いが違っているとこを意識させ、次回の学習意欲につなげる。

8　板書計画


ごんぎつね　新美南吉
「こいつはつまらないな」と思ったごんの気持ちを考えよう。
「ごんはへえ、こいつはつまらないな」と思いました。「おれがくりや松たけを持っていってやるのに、そのおれにはおれを言わないで神様にお礼を言うんじゃあ、おれはひき合わないな。
毎日山へ行く
。松たけ
。くり
ぐちぐち
神様のしわざ
おれをまってもうんない
自分は何もしてない
気付いてほしい
兵十のおかあの望みをうばった
直接言う!?
。二人のあとをつけていった。
長い
。お念仏がある……しゃがんだ
。そばできいてた
。かくれていた
つキウキ
。兵十のかげぼうしをふみふみ……
いたずらばかり
気付いてほしい
仲良くしたい
つがまるはねたらまずいうたれる
心のかっとう
@ペイントでごんの気持ちを表そう。
@今日のごん日記を書こう
じぶんごと
気持ち



本時の指導（８/１１）　　２組　喜田　里実

（１）　本時の観点別目標

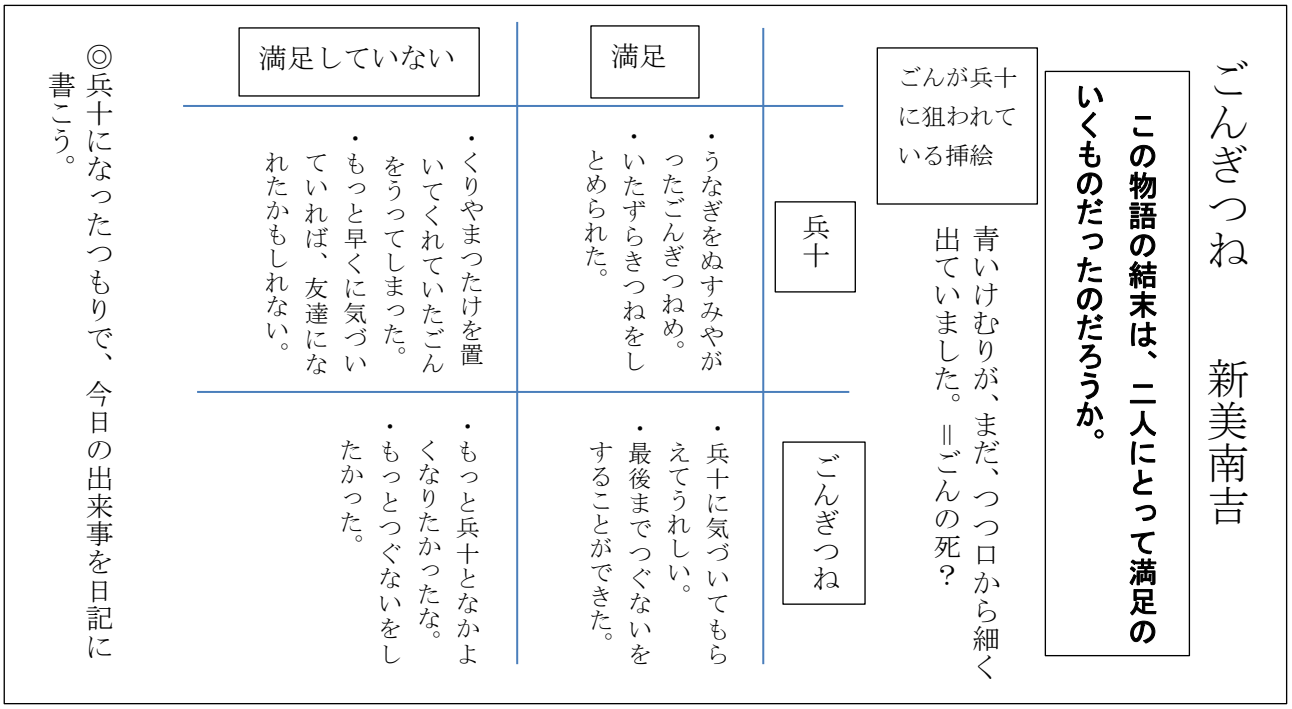
この物語の結末での出来事はごんと兵十にとって満足のいくものだったのかについて、情景や言動の叙述をもとに豊かに想像して読むことができる。【読むこと】

（２）　仮説に迫るための具体的手立て

・最終場面の中からだけでは考えられない発問にすることによって、これまでの学習を振り返ったり前までの段落の叙述を読み込んだりと、物語全体をもとに考えられるようにする。〈仮説１〉
・自分の考えを書いたらまずはペアで交流をする。友達の考えに触れることで読みの幅を広げられ、また全体の前で発表する前の練習にもなると考えられる。〈仮説２〉

（３）　展開

過程	時配	学習内容と活動	◇指導上の留意点と◎評価
導入	２	**１　前時の学習を振り返る。** ○前回までで、ごんと兵十はお互いをどう思っていましたか。 ・ごんは気づいて欲しかったと思う。 ・兵十は今も、ごんのことをいたずらきつねだと思っている。	◇前時までの学習を、掲示物を使って振り返り、二人の気持ちの温度差を想起させる。
展開	５	**２　本時のめあてをつかむ。** **この物語の結末は、二人にとって満足のいくものだったのだろうか。** ○第６場面を読みましょう。	◇最後にうたれる場面を音読することで、その時のごんや兵十の言動に着目し、学習の焦点を捉えやすいようにする。
	３０	**３　自分の考えをノートに書き、ペアで交流し、その後全体交流をする。** **①　ペアでの交流** 本文からの根拠をもとに、自分の考えを伝える。 **②　全体での交流** 自分の意見や、先ほど聞いた友達の意見をもとに、より多くの友達の意見を知る。 ○兵十はどう思ったでしょうか。 ・ようやくいたずらきつねのごんを仕留められた。 ・ずっとくりやまつたけを置いていたのがごんだと知ってショックを受けている。 ・もっと早くに気づいていれば・・・。 ・取り返しのつかない事をしてしまった。	◇自分の考えをノートに書かせる。その際に、本文のどの部分からそのように考えたのかを考えさせ、ノートに書きだしたり教科書に線を引いたりさせる。 ◇ごんと兵十、二人についてそれぞれ書くように伝える。 ◇友達の意見でいいなと思ったものや、自分にはない考えだと思ったものはノートに書き留めるようにさせる。 ◇満足している、していないのどちらかに正解を決めるのではなく、叙述をもとにして考えていることや、これまでの学習をふまえて考えていることを大切にす

			る。
		○ごんはどう思ったでしょうか。 ・やっと兵十に気づいてもらえた。うれしい。 ・これでやっとつぐないもできた。 ・もっと兵十となかよくなりたかったな。	◇友達の意見を聞いて意見を変えることも認める。
まとめ	8	**4　話し合ったことをもとに、もう一度自分の考えをまとめて兵十日記に書き、本時のまとめとする。** ・今日おれは、ごんをうってしまった。ずっとおれのためにくりやまつたけを届けてくれていたのに。 ・きっといつかのうなぎのつぐないのつもりだったんだろう。もっと早くに気づいていればよかった。 ・このごんぎつねの話を加助や他の村人たちにも伝えないと。	◎増やした語句を、日記の中で使っている。（日記） ◎この物語の結末での出来事はごんと兵十にとって満足のいくものだったのかについて、情景や言動の叙述をもとに豊かに想像して読み、兵十の視点からその日の日記を書いている。 （ノート・発言）

（4）板書計画